
sora rhythm

西澄まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o r a r h y t h m

【Nコード】

N 4 8 9 9 Y

【作者名】

西澄まゆ

【あらすじ】

バイバイ、名西。バイバイ、弱かった頃の俺。バイバイ、真由美。
。俺は歩きだすんだ。過去を抱えることが、どんなに辛いことだとしても。

12月のある日、西松添は春に入学した名倉丘西をやめ、全寮制の清怜学館に入学する。犯した過ちはそのままに、よちよち歩きの自分のまま。

赤色灯の闇（前書き）

何度目かの復活になるのかな？
またよろしくです

赤色灯の闇

2011・12・10

『母さん、俺強くなるから。今決めたから』

『心配しないで、もう真由美はいない。わかってるから。』

『今まで育ててくれて、本当にありがとう。たくさん迷惑かけて、ごめん』

『じゃあ、行くからさ。バイバイ』

俺は送信ボタンを押した。ちょっと震えていたかもしれないけど、あえて気づかないふりをしよう。

大きく息を吸い込んで顔を上げた。吐き出した息が赤色灯の光にきらめく。

早朝の駅へ続く道は暗くて冷たかった。ミトンになった手袋をすり抜けて、冷気が入り込んでくる。冬の4時半だから無理もない。俺は立ち止ってマフラーをまき直し、ひとつ息をついてまた歩き始めた。

まだ先は長いんだ、ちゃんと自分で歩いていくって決めたんだから。

親不孝者に告ぐ。
(前書き)

第二話！長いです。

親不孝者に告ぐ。

「そんな辛気臭い顔して歩いてると、また女の子に嫌われるぜ」

闇を優しく和ます赤色灯の下に、闇を覚ますような美形が一つ。

「礼！」

早川礼はいつもの学ランに紺のマフラーを巻いて、コンビニの裏の赤色灯にもたれかかっていた。吐く息が白く残って、礼の整った顔を曇らせる。

「女みたいで嫌だから、そうやって呼ぶなって言っただろ。」

「何をいまさら」

礼は小さい頃から一緒にいる、いわば幼なじみというやつだ。もはや腐れ縁に近いものもあるけども。そして物心ついたときから、っていうか漢字を覚え始めたくらいから、こいつは女みたいな自分の名前を嫌ってる。「ライ」を「レイ」って呼び間違えると烈火のごとく怒るから、気を付けた方がいいよ。

ま、女みたいな綺麗な顔してるんだけどね。

「っていうか、よく来る時間がわかったね。」

「別に。添そっの部屋の電気がつくの、俺の部屋から丸見えだからね。」
そうだった。こいつの家は隣のマンションだから、カーテンを開けてると丸見えだ。俺、今日は最後に空気吸つところと思って、窓まで開けてたわ。

「ちゃんとお母さんとお話してきた？」

礼は俺の顔を覗き込むようにして聞いた。黙ってうつむいて、静かに首を振る。

「そっかー・・・」

礼は口から白い息を大量に吐き出しながら言った。冷えたアスファルトの感触が、靴を通して伝わってきそうな、冬の夜明け。

礼は突然ふつと笑うと、

「親不孝者め」

ふざけた調子で呟いた。

「何を、」

反論しかけた俺の鼻先に、奴は何かをぶら下げた。つい手でバシッと掴み取る。

それはフェルトの布で作られた、可愛らしいピンクのお守りだった。

「これ・・・？」

「江梨子に渡すように頼まれたんだよ。」

礼は面倒くさそうに言った。俺の目の奥に、同じ部活だった江梨子の顔が浮かぶ。

ふだんのクールで美人な顔と、俺を責めたときのあの恐ろしい表情。その二つの表情は、指紋を認証するように重なって一つになった。

あの江梨子が・・・？

「お前のことを許すって言ってたよ。」

礼は俺の手のひらに置き去りにされそうなお守りをひっくりかえした。そこには赤い手袋をした女の子がフェルトで形作られていた。少し茶色がかった巻き髪に、いつも笑ってる瞳。赤みの差したほった。

ピンクのシュシュ

ずっと見慣れてきて、でも急に遠ざかった真由美のその顔がそこには縫い付けられていた。

「でも、真由美のことを忘れたら許さないとも言ってた。」

礼はいたずらっぽく笑って、お守りをおれのコートのポケットに滑り込ませる。

代わりに右肩に下げていた鞆から、俺は黒いノートを取り出した。

「忘れないようにこれ持ってくんだ」

礼は黙って日記帳を開くと、黙々とページを開いた。赤ペンで書かれたページで、手が止まる。

そのまま駅に向かって、俺たちの足は進みだした。もちろん、目は文字を追ってる。

清算しようとしている俺の過去をこのノートは全部知ってるんだから。

・・・思い出の墓場だ。

高校デビューの冷や汗

2011・4・7

「ねえねえ、西松くんはこの中学から来たの？」

漫画や小説でよく見る光景がそこには広がっていた。

校庭にひらひらと舞い落ちる桜。さあアンパンに乗っける、とでもいうように綺麗な形をした花びらが、風に乗って俺の学ランをかすめていく。暖かい日差しが教室の白いカーテンをわずかに越して俺たちに降り注ぎ、まだ少し冷たい風がそのカーテンを揺らしていた。さつきから満面の笑みで俺に話しかけてくる女子たちも、また俺の描いていた高校生活の一部。

「萩山だよ。知らないと思うけど・・・」

余裕なふりして返しながら、ずっと手が震えてる。怯えちゃうよ、全く。

内心、冷や汗冷や汗。高校デビューってこれだからなんだかなあ。

あんまり楽しくなかった中学校生活を何とか受け流し、泥沼を歩くような受験勉強をやりきって今日ここに足を踏み入れた。とりあえず陸上部がなかったのと女の子にもてなかったことしか思い出のない中学校をでていれば、別にやろうとしなくたって自動的に高校デビューすることになるだろう。

県立名倉丘西高校。校則が緩く、伝統校で知られるこの学校は高校デビューにはもってこいだ。

西松添、にしまつそうちよつと張り切つてたりする。

俺は窓から空を盗み見た。青く突き抜けて、瞳にまぶしい。

俺はここでやっていく。

春なんて、きつとみんな無責任な誓いをするものさ。なあ、君もそうだっただろ？

物理とはトキメキである。

「西松くんてさー、ノート綺麗だよなー」

眠たすぎる物理の授業。今すぐよだれをたらしながら寝たいくらい気だるい。

不意に横から話し掛けられて、俺はびくりと肩を震わせた。いけないいけない、油断してすっかり力を抜いてた。

「え・・・いや、そんなことないと思うけど。な？」

俺は慌てて後ろの席に座っている礼に話を振った。「西松」が前、「早川」が後ろってというのは、小学校のときからお決まりの配置だから、もう慣れっこ。

「うん・・・添は字がふえあ・・・」

完璧に寝ていたんであるう礼は、フニヤフニヤと寝言のような答えを返して、また夢の中へ。ゴスツ、という無粋な音をたてながら、机におでこがぶつかった。本当、昔から生粋の自由人だよな、こいつ。

「・・・寝ちゃった・・・の？」

「うん・・・そうみたい」

話しかけてきた女子は、一瞬きゅつと眉根を寄せた。呆れてるよ。でもその次の瞬間には、彼女の表情は笑顔に変わっていた。

「二人とも面白いねー！」

授業中だというのに、ケラケラと声をあげて笑う。先生がこちらをキツとにらんだ。

彼女は笑うのをやめ、先生を宥めるように肩を竦めた。

それから、もう一度俺のほうを振り向く。

「あたしの名前、覚えて」

今度はばれないように小声で。

「清水真由美」

彼女の髪が茶色がかっていることに、俺は今気がついた。毛先はく

るくると巻かれて、真っ白な小さい顔を包んでいる。

「よろしくね、西松添くん」

俺はきつとこの時から、真由美の虜になってしまったんだろう。

物理とはトキメキである。(後書き)

活報は後で書きます！

誰にも言えない(前書き)

超久々!!

活報は後で書きますよ

誰にも言えない

授業が終わった。

同じ六時間授業なのに、中学のときより疲れたと感じるのはなぜだろう。チャイムが鳴っても授業が終わったことに気付かなかったかのように、しばらくみんな固まっていた。

その沈黙を破るかのように後ろで何かかもぞもぞと動いて、俺の肩を指先でちょんちょんとつついた。

「礼……」

「おはよう。添、お前はストレスが溜まりやすいほうだから、あんまり真面目やってるといつか切れるぜ」

礼は一人で異様に元気だった。どうせ一日中寝てたんだろう。まだ入学して三日ほどしか経ってないというのに、本当しょうもないやつ。肝が据わっているともいえるけどさ。

「で、どうするんだよ」

「何がだよ」

「部活だよ。今日から部活動見学だろ？」
そうだった。

ここ名倉丘西では、一年での部活動選択が、今後の高校生活に大きく関わってくるらしい。ああ、確か昼休みに色んな部活の先輩たちがPRに来ていたっけ。

まあ、昼休みにチャラチャラした先輩が入ってくるのは、恐怖意外の何物でもないっていうのが、新入生の本心なんだけど。

腰パンに茶髪、タンクトップにピアスの男の先輩なんて初めて見だし、平気でパンツを見せて歩いてる、キャバ嬢みたいな女子高生なんて、今まで知らなかった。

世界って広い。本当、高校入ってそう思えるようになった。
まだ一週間もたっていないんだけどさ。

「・・・そういう礼は何をやるんだよ。また陸上？お前、足ホント速かったしな」

「馬鹿言え。もう二度とやるか、あんな拷問。」

礼は吐き捨てるようにそう言つて、ぷいっと顔をそむけた。

そんな姿はまんまガキだ。

礼とは昔からずっと一緒にいたけど、幼心に『礼は周りより大人』だと感じるが多かった。もちろん、幼いとは言えない年に俺が成長してもそれは変わらない。

小学校のときも中学校のときも、いつの時代でもこいつは周りと一緒に線を描いていた。

無理に周りと無理に馴染もうとすることは一切なく、時に痛々しく見えるほどに礼は周囲に反発した。同化しないことによつて、大勢の集団の流れと擦れて、傷ついて磨かれて、気づけばいつもあいつは一人で大人になっていた。

でもたまにふと見せる表情はびっくりするくらいあどけなく子供で、突然それを出すから、見せられた方はたまらない。

・・・礼からもう目が離せなくなる。

俺はそれが激しくなり始めた中学くらいから、俺はずっとその感覚に悩まされている。

綺麗な横顔に、気づかれないように呟く。

答えるよ、俺より『大人』なんだから、お前は答えを知ってるんだろ。

この気持ちは、何なんだよ？

誰にも言えない(後書き)

うん、なんかちょっとあたしも思ってた方向に進んでるけど、
B○とかそっち系にはならないから！
安心して！

まあそっち系あたし嫌いじゃないけど！(爆)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4899y/>

sora rhythm

2012年1月8日19時54分発行